

人生の詩編

[詩編 24 編 1～10 節]

【賛歌。ダビデの詩。】

地とそこに満ちるもの 世界とそこに住むものは、主のもの。

主は、大海の上に地の基を置き 潮の流れの上に世界を築かれた。

どのような人が、主の山に上り 聖所に立つことができるのか。

それは、潔白な手と清い心をもつ人。むなしいものに魂を奪われることなく
欺くものによって誓うことをしない人。

主はそのような人を祝福し 救いの神は恵みをお与えになる。

それは主を求める人 ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人。

城門よ、頭を上げよ とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。

栄光に輝く王とは誰か。

強く雄々しい主、雄々しく戦われる主。

城門よ、頭を上げよ とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。

栄光に輝く王とは誰か。

万軍の主、主こそ栄光に輝く王。

[1] 詩編 24 編の背景

今日与えられているみ言葉・詩編 24 編は、それほどいつも開く個所ではないかもしれませんが（先週の 23 編のようには）。ただ、ユダヤ人たちにとっては、これは毎週最初の日に朗唱される詩編であると言われていています。また、先ほども交読文としても読んだように、キリスト教会の中でも重んじられてきたもので、特にクリスマス前の時期にはしばしば礼拝の中で読まれます。それは、7 節以下に繰り返される、「とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。栄光に輝く王とは誰か。万軍の主、主こそ栄光に輝く王。」という言葉が、主イエス・キリストの到来を待ち望む言葉として一緒に唱和するに相応しいと思われるからです。

歴史的には、表題にあるように、「ダビデの詩・賛歌」という分類の中に含まれています。言い伝えでは、この詩は、あのイスラエルの王ダビデが、モーセの「十戒」を収めた「契約の箱」を、都エルサレムに運んだ際に、皆が喜び歌った歌が原点ではないかとされています。但し、この詩そのものはもっと後代になってまとめられ、ソロモンによって神殿が出来た後、そこに都もうでをする際に

人々が歌ったものであろうとされています。このようなことが想像出来ます。

契約の箱を運んでいる人々の群れがエルサレムに近づき、そのエルサレムの入口には群衆が、聖所には祭司たちがいて、契約の箱の到着を待っています。その行列が近づいてくると、群衆はこぞって創造主である神を賛美し始めます。1-2節。「**地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの。主は、大海の上に地の基を置き、潮の流れの上に世界を築かれた。**」

その後、契約の箱を迎えるにあたり、自分たちの信仰を確認するために、祭司と群衆が歌い交わします。群衆は、3節にあるように「**どのような人が、主の山に上り、聖所に立つことができるのか。**」と問いかけると、祭司がこう答えます。4-6節。「それは、潔白な手と清い心を持つ人。むなしいものに魂を奪われることなく、欺くものによって誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し、救いの神は恵みをお与えになる。それは主を求める人、ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人」と。

そして、更に契約の箱を運ぶ群れがエルサレムに近づいてきました。7節以下の箇所です。先頭を歩く先導者から大声が発せられます。「**城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。**」すると群衆が尋ねます。「**栄光に輝く王とは誰か**」。群れの先導者が答えます。「**強く雄々しく戦われる主。**」そして、繰り返します。「**城門よ、頭を上げよ。とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。**」群衆もそれに対してもう一度尋ねます。「**栄光に輝く王とは誰か**」。群れの先導者が答えます。「**万軍の主、主こそ栄光に輝く王。**」

このような歌い交わしがこの詩編で描かれているのですね。

[2] 巡礼者である自分を問いながら

このように、信仰者が礼拝を捧げるために神の家に入っていく。その時、果たして自分たちは礼拝に相応しい者(民)になっているだろうかと自問しながら近づいてゆく。その意味でも、時に「**巡礼の詩**」とも呼ばれる詩編ですけれども、私は今回この詩編を味わわせて頂いて本当に良かったなあとと思っています。これまで正直あまり注目していなかった詩編だったのです。けれども、ああ、これは私たちの人生が描かれている詩編なのかもしれないと思ったのです。三つの場面です。

初めは、「**誕生**」です。「**地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの。主は、大海の上に地の基を置き、潮の流れの上に世界を築かれた。**」。世界の創造です。これ以上ないスケールですが、この世界のものは「**主のもの**」だということですね。神様によって命を与えられたもの。そこには既に**祝福**があるのですね。私たち一人一人もこの世界の一部。神様の意思によってその命が与えられた存在。

その次は、それこそ「巡礼の旅」です。神様に会い続け、いつもそこに立ち帰って行く旅。私を造って下さった神様に向かって歩んでいる私たちの人生なのです。長い旅路です。その中で私たちは自分のこととして「どのような人が(そして私は)主の山に上り、聖所に立つことができるのか。」と自分の人生を振り返るときどきがあると思います。

少し話が脇道に逸れますが、私は先日 NHK の E テレで、『遠藤周作 封印された原稿』という番組を見ました。信仰者遠藤周作(没後 25 年になる)の、心の旅路を垣間見ることが出来るとても良い番組でした。タイトルの「封印された原稿」というのは、昨年未発表だった小説が発見されたのです。その中身は、自分の父や母への思い、葛藤が描かれているものであるということです。書かれたのがちょうどあの『沈黙』を世に出した少し後位で遠藤が 40 代半ばの頃です。『沈黙』は、神様をどうしようもなく裏切ってしまう弱い人間に対するキリストの赦しというものがテーマでしたが、今度の『影に対して』という小説は、遠藤が 10 才の時に離婚し、しばらくして亡くなった母親に対して慕い求める心と、父親に対するある種の憎悪、受け入れ難い思いが浮き彫りにされているのだそうです。一方で神の愛と赦しを信じ、一方で自分の内側に隠れている暗い心に苛まされる、その遠藤周作の生身の人間の姿が小説を通して見えてきます。番組の中では、遠藤の息子である龍之介氏がインタビューに応じて、「父は、祖父に対しての許し難い思いを、60 代半ばまで抱えて苦しんでいたと思う」というようなことを語っていました。

その遠藤周作も、ある時、ボソッと「もういいかな」とつぶやいたのを息子の龍之介さんは耳にしたということを語っていました。何を指しているのかはハッキリとは分かりませんが、恐らく父親とのことだったのではないかと思うと語っておりました。遠藤周作も、何か重たい荷物を下ろしたのかもしれませんが。それから何年か経って 73 才の時に、遠藤周作はその生涯を終えたのです。

「巡礼」とは、荷物を背負いながら歩む人生の旅なのだと思います。好むと好まざるとに関わらず、例えば私たちは親を選ぶことが出来ませんし、生れて来た時の環境を選ぶことが出来ません。また、様々な後悔や、自分自身を愛せない思いも抱えて生きている所がどこかあると思います。…しかし、それで人生の幸・不幸が決まるのでしょうか? そんなことは決して無いと思います。詩編 24 編は、このように語っていました。「誰が神に捨てられるのか」を言うのではなくて、「どのような人が、主の山に上り、聖所に立つことができるのか」と言い、このように告げます。「それは、潔白な手と清い心を持つ人。むなしいものに魂を奪われることなく、欺くものによって誓うことをしない人。主はそのような人を祝福し、救いの神

は恵みをお与えになる。それは主を求める人、ヤコブの神よ、御顔を尋ね求める人」。一神様の前に完全な人間になど人はなれません。でも大切なのは心根です。心の向きです。むなししいものに魂を奪われな、欺くものによって心を捕われるな。あなたがすべきことは、**主を求めること、神様の御顔を尋ね求めること**だと言っていると思います。「信仰」というのは、「状況」や「環境」を信じるのではなくて、私を造られた神を信じることです！ そして私を愛し、私のために命さえ献げて下さった救い主を信じることです！

[3] 栄光の王が、あなたを待ち、迎えて下さる

私たちも、いつかは分かりませんが、この旅の終わりを迎える時があるでしょう。でも、その終わりは、まるでブラックホールのような吸い込まれてゆく闇ではありません。この詩編の3つ目の場面です。7節以下。

「城門よ、頭を上げよ、とこしえの門よ、身を起こせ。栄光に輝く王が来られる。」—これが巡礼、人生の旅のゴールです。主キリストが、**栄光の王が、あなたを待ち、迎えて下さる！** だから、**あなたの頭をあげなさい！**

使徒パウロは言いました。「(私たちは)目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいる。それでわたしたちは、心強い」(コリントの信徒への手紙二 5:7)。

この世の中、お前はダメだとか、もっとこうしなさい、ああしなさい、という**否定の言葉**ばかりが聞こえてきます。でも聖書はそうは言いません。あなたは、あなたという存在は、**神に造られ、神に愛されている**。栄光のキリストがあなたと共におられ、あなたを照らし、また最後の日の永遠の生命の中に迎えて下さる。だから、暗い心の中に引きずり込まれないで、頭を上げなさい。遠藤周作ではないですが、「もうこのこと(問題)はいいかな…」と、いつしか自分の心が柔らかかにされる時も、神様は私たちに与えて下さるのではないのでしょうか。私たちが自身が、既にキリストにおいて本当に愛され、赦されている。その事実が私たちの心に灯を灯すのですね。

この詩編 24 編は、人生の詩編だと思いました。私たちには、私の人生を本当にお委ねすることが出来るお方がある。この世界を造って下さったお方、また、私が神様の所に行くのではなく、私の所にまで来て下さったイエス様がおられる。この方に依り頼める幸いを頂いてこの週もご一緒に歩んで行きましょう。

お祈り致します。